

特別号…大手民鉄の〆観光列車〆

「観光・インバウンド施策の現状と展望―大手民鉄16社―」

大阪と吉野・ 飛鳥エリアを結ぶ 観光アクセス鉄道 青の交響曲（シンフォニー）

話題性のある特急列車を開発してきた近畿日本鉄道が、吉野線エリアの観光振興を目的に2016年9月10日に運行を開始したのが、観光特急「青の交響曲（シンフォニー）」である。「上質な大人旅」がテーマで、一番列車の特急券は発売から30秒で完売、3年が過ぎた今も休日の座席は予約が取りにくいという。観光客の増加に伴い、地域も少しずつ活気づいてきた。観光特急を通じて育てていく地域とのつながりについて、お話を伺った。

文●茶木 環／撮影●加藤有紀／写真提供●近畿日本鉄道株式会社

豪華な空間で目的地へ向かう

——「青の交響曲」は、どのような企画で誕生したのでしょうか。

柴田 「青の交響曲」は、南大阪線と吉野線を走行し、南大阪線大阪阿部野橋駅―吉野線吉野駅間を約1時間20分で結んでいます。

吉野という「一目千本」と称される吉野山の桜が有名で、吉野駅の定期外ご利用のお客さまの約6割は、桜が満開となる春に集中していました。けれども、吉野の豊かな自然はそれ以外

のシーズンも素晴らしいですし、吉水神社や金峯山寺などの世界遺産もあります。

また沿線には石舞台古墳や高松塚古墳など史跡が多く残る飛鳥エリアや、洞川温泉やみたらい溪谷、面不動鍾乳洞がある洞川エリアがあり、これらのエリアにも足を運んでいただきたいという思いは、地域の皆さまも近鉄も一致していて、沿線へのさらなる誘客を目指して企画しました。

2016年9月に運行を開始し、1日2往復、基本的に水曜を除いて毎日運行しています。

——座席定員制で有料の近鉄特急の歴史は戦後まもなく始まり、東海道新幹線開業後は都市間輸送にも注力されてきました。そうした歴史が現在の観光特急につながっているのですね。

柴田 ええ。現在は大阪・京都・名古屋の大都市を拠点に、JRを除いて最長となる総延長501・1kmの営業路線を擁しており、主要路線のほぼすべてで特急を運行しています。

観光特急では2013年より大阪難波駅・近鉄名古屋駅と賢島駅を結ぶ「しまかぜ」を運行しており、贅沢な

車内空間をお客さまにご提供して好評をいただいています（2014年には京都駅発着が追加）。しまかぜは都心部から目的地までの所要時間が2時間〜2時間半で、車内で過ごされる時間に余裕がありますが、青の交響曲は約80分と乗車時間がそれほど長くはないんです。その中で、いかに旅の時間をくつろいで過ごしていただくかが、いちばんの課題となりました。

——青の交響曲は「上質な大人旅」がテーマだと伺っています。

柴田 中高年層を意識して、内外装で



近畿日本鉄道株式会社
鉄道本部 企画統括部
営業企画部長

柴田裕子
Yuko SHIBATA

高級感を演出しています。車体のカラーは、緑豊かな吉野線沿線走るのに何色がふさわしいのか考え、落ち着いた濃紺色にしました。3両編成で1号車と3号車が客車（全席指定で65席）、2号車はラウンジ車となっています。座席は座り心地を追求した幅広のデラックスシートで、2列＋1列で設置しました。大型の固定テーブルを備えたサロン席、ツイン席もあり、車両の中とは思えない重厚な空間が広がっています。ラウンジ車にはバーカウンターや革張りの椅子（20席）を設置し、ホテルのバーのような落ち着いた空間を演出しました。お客さまからは、座席からラウンジ車へ移動したり、ラウンジ車のライブラリーで本に目を通したりしているうちに目的地へ到着し、「あつという間だった」というお声をよくいただきます。

——特急車両ではなく通勤車両を大幅に改造されたと伺っています。

柴田 当社は標準軌（1435mm軌間）と狭軌（1067mm軌間）の路線があり、南大阪線と吉野線は狭軌です。標準軌の特急列車は使えず、狭軌の路線で使用されている車両の中から通勤車両である6200系の車両を改造しました。

この車両にはトイレがないので新たに給排水設備を整備したほか、ドア数を減らし、ラウンジは落ち着いたインテリアとするため、窓を半分ほどの高さにするなど、かなり改造していま

す。投資という部分では大きくなりましたが、お客さまに上質で心地よい時間を過ごしていただきたいという思いから、改造に踏み切りました。デザイン監修は店舗デザインなどを手掛けるIMOデザイン、飯田英二先生、設計は近鉄グループの全日本コンサルタンが担当しています。

地域連携で地元の魅力をPR

——鉄道会社は沿線地域と強い結び付きがあります。乗客には地域の魅力をもつように伝えていきますか。

柴田 「青の交響曲」という名前は、沿線の魅力的な観光資源と調和し響き合いたいという思いを込めて付けたものなんです。お客さまに車内で贅沢な時間を過ごしていただいた後は、その地の魅力を存分に楽しんでいただきたい。列車内でも、沿線の魅力をたっぷり味わっていただきたいと考えています。

ラウンジで提供するメニューは沿線地域の特産品やそれを食材としたものがほとんどです。西吉野の柿を使用した柿もなかや吉野大淀町産の番茶を使ったマカロン、吉野梨のジェラートやスパークリングリキュール、吉野や御所・葛城の地酒などを提供しています。また、当初は中高年の女性のお客さまを想定していたのですが、若い世代のお客さまも多く、インスタ映えるオリジナルスイーツも季節ごとに提供し、好評を博しています。

グループの近鉄リレーリングが沿線の生産者や加工業者の方々と連携して商品開発などを行い、飲食メニューのセレクトを行っています。

——観光特急の運行によって沿線地域の交流人口も増加します。地元の期待も大きいのではないのでしょうか。

柴田 そうですね。沿線の主な観光地、飛鳥エリア（明日香村・高取町）、吉野エリア（吉野町）、洞川エリア（天川村）では地元の方々と当社でタッグを組み、着地型の観光の拡充を目指して取り組んでいます。以前はメイン通りの土産物店や飲食店も、割と早い時期に店を閉めていたのですが、青の交響曲が運行するようになって「営業時間を延長しよう」と言ってくださるようになりました。新しい店もどんどんオープンしています。青の交響曲運行1周年の際には、ラウンジ車で配布する記念乗車証を提示するとサービスが受けられるというイベント企画を実施したのですが、この企画にも多くのお店にご協力いただきました。

また、吉野町では「桜もいいけど夏もいい。」というテーマで「納涼夜吉野」というイベントを開催しています。吉野山界隈の五施設や鳥居がライトアップされ、コンサートなども行われます。去年の冬には豆まきにちなんだイベントも行われましたが、皆さまだいぶん積極的に地元の魅力をPRされるようになりました。年間を通じて地域の魅力をお客さまにお伝えしてい

こうという取り組みを連携して行っています。

将来を視野に入れた活動

——現在だけではなく、沿線地域の将来を見据えた活動もされていますね。

柴田 ええ、高取町の奈良県立高取国際高等学校国際コミュニケーション科では地域の課題を学ぶ「あすか学」という授業を行っています、その一環で当社の鉄道本部企画統括部営業企画部の堀信一朗課長が吉野線の課題と、青の交響曲の運行目的や実施中の施策、成果などを生徒さんたちにお話しさせていただきました。先生方も含めて皆さんとても熱心に聞いてくださり、身の引き締まる思いだったそうです。飛鳥地域の文化、観光資源を再認識するために、さまざまな切り口から学ばうとされていると堀も感激していました。



濃紺色の車体が緑に映える観光特急「青の交響曲（シンフォニー）」



上／ラウンジでは沿線の食の魅力を提供する
下／季節ごとに提供するオリジナル
ケーキセット。こちらは9月初旬まで



デスクスタンドが優雅な時間を演出



吉野の美しい自然を背景に吉野川橋梁を走る

吉野線沿線は、非常に魅力的な地域なのですが、まだまだ掘り起こし切れていない部分がたくさんあると考えています。一方で、普段吉野線を利用されている生徒さんにとっては当たり前すぎて、気付いていない魅力があるかもしれません。「あすか学」という授業を通じて、ほかの地域にはないこの地域の魅力に気付き、改めて自らの地域の深みを感じ、誇りを持っていただければと思います。若い時にこうした形で地元について学ぶことは地域にとって、とても大きな力となると思います。

——地域の景観も将来に向けて育ていく取り組みをされています。

柴田 2016年から吉野線を紅葉や季節の花で華やかに彩る「吉野線華（はな）いっぱい計画」に取り組んでいます。沿線の景観を整備して、新たな魅力を生み出していきたいと考えています。飛鳥ー吉野駅間にモミジ・アジサイ・ユキヤナギ・ドウダンツツジ等の約1万7000本を植樹しました。特に薬水ー福神駅の区間は、870本のモミジを約1kmにわたって植樹したので、近い将来、モミジの中を電車が走る風景を楽しんでいただけるようになると期待しています。周囲には地元の方々が手入れをされている吉野杉の林や森があります。そうした観光

資産と一体化した景観づくりを行っていったらと思います。

その地にしかないものを掘り起こす

——人を呼び込みたい地域がある一方で京都ではオーバートーリズムの問題を抱えています。インバウンドを含め、沿線を周遊してもらうような取り組みはされていますか。

柴田 京都の隣県である奈良県には人を呼び込みやすいと考えています。奈良市内にはインバウンド観光客を含め、たくさんの方が訪れているのですが、当社としては奈良市内より南の方にもっといらしてほしい。そのため沿線地域の方々と一緒に汗を流していきたいと思っています。

——近年は日本の楽しい列車に乗りたという外国人観光客も多いようです。インバウンドに向けてはどのような発信をされていますか。

柴田 社内にインバウンド営業を行う部署があり、しまかぜや青の交響曲についても外国の方々に向けたPRを行っています。沿線各地の見どころや宿泊施設、グルメ、体験などさまざまな着地型観光についてご紹介し、そこに行くには、しまかぜや青の交響曲などの観光特急をご利用いただき、移動時間も楽しんでいただきたいと思っています。

——外国の方々を含め、幅広い層に訴求ができているということですね。

柴田 最近、青の交響曲に関するW

e bアンケートを実施しました。その中で興味深かったのが、当初メインターゲットに挙げていた中高年女性だけではなく、若い世代の方や男性のご利用が多かったということです。また、特急料金と特別車両料金の合計で大人720円、小児370円という価格設定については、この料金でこれほど豪華な車両に乗れるのなら満足であるとのことでした。

——今後についてはどのようにお考えですか。

柴田 観光の力を育てていくには、外からお見えになった方々に地域がどう見えているのか、それを俯瞰して地域の魅力を掘り起こし、磨き上げていくことが重要だと考えています。地元の方々にも青の交響曲に乗車していただいて、沿線を訪れる観光客の方々が何を喜び、感動されるのかを捉えていただきたいと思っています。

7月には、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録を受け、古墳モチーフを車両内外にちりばめた「こふん列車」を、また、明日香村と飛鳥地域のPRの一環として、大河歴史ロマン漫画『天上の虹』の里中満智子さんのイラストと万葉歌を外装デザインに使用した「あすか万葉」トレインを、南大阪線と吉野線を中心に運行開始しました。

鉄道は、非常に有効な情報発信ツールです。これからもその地にしかない魅力を、鉄道を通じてお伝えしていきたいと思っています。

青の交響曲 (シンフォニー)

吉野・飛鳥へ。上質な車内空間で大人旅を楽しむ

「上質な大人旅」をコンセプトとする観光特急「青の交響曲 (シンフォニー)」。

多様な楽器や楽章が魅力の交響曲のように、自然や食などさまざまな観光資源にあふれた沿線の魅力と調和し響き合いながら走る観光特急を目指し、その名が付けられている。

落ち着いた濃紺色の外装の3両編成で、客室となる1・3号車には、2列＋1列で座り心地を重視した幅広シートの座席を配置。ひとり旅やグループ旅を楽しむ利用客のために、テーブルを備えたツイン席、サロン席（3～4人用）など、さまざまなタイプの座席が用意されている。また、2号車のバーカウンターを備えたラウンジでは、地元の名店や酒造、ワイナリーのメニューを味わうことができる。



車両前面に配置された「Blue Symphony」のエンブレム。下部の飾り罫は、吉野山の木々や草花を象徴している

DATA

運転区間：大阪阿部野橋～吉野 1日2往復／4便

運行日：原則水曜日を除く毎日運行

列車種別：観光特急

料金：大人 720 円・小児 370 円
(特急料金＋特別車両料金)

※上記料金のほかに普通運賃が必要



左／ホテルを彷彿させる落ち着いた雰囲気のラウンジスペース
上／さまざまなタイプの座席が用意された客室。上質な空間が広がる



ベンチがあるラウンジ車のライブラリー



ヘッドレストのカバーには、ロゴが金色の糸で刺繍されている

地元を走る交通事業者の使命を高校生が学ぶ

Column



奈良県立高取国際高等学校 教諭

村上浩之

Hiroyuki MURAKAMI

本校は1984年に開校し、2005年に国際科の専門高校に改編しました。2013年からは国際英語科・国際コミュニケーション科・普通科を併置、海外にルーツを持つ生徒や、外国での生活が長い生徒も在学し、国際的な視野を持つ人材の育成に努めています。

このうち国際コミュニケーション科のカリキュラムでは、選択履修科目「あすか学」という郷土学習の授業を設けています。地元の高取町・明日香村の歴史や文化、産業を学ぶことによって、

自分たちが暮らす地域の課題を見つけ、自分たちなりの解決策を提言し発信していくことを目的とする「課題解決型」の授業です。

そこで、今年6月には「飛鳥地方を走る近鉄沿線の魅力の発見～観光特急『青の交響曲 (シンフォニー)』～」と題して、近鉄の営業企画部の堀信一郎氏に出前授業を行っていただきました。授業では、この観光特急を走らせるに至った経緯や、その経済波及効果等について、お話しいただきました。生徒たちは興味深く聴

き入り、自分たちの生活圏である飛鳥地方の「魅力の再発見」や「生活を支える交通インフラ」「観光交流人口を増やすための交通インフラ」についても、深く考えることができた様子です。

本校の最寄りの近鉄飛鳥駅は、多くの生徒が通学で利用しています。そこで、人口減少の傾向にあるこの沿線地域の活性化に一役買おうと、秋には、吹奏楽部が駅前コンサートを開催したり、家庭クラブが待合室で使っていただけるようにと座布団を寄贈しています。また、卒業シーズンには、本校と近鉄と協同でデザインした卒業記念入場券を飛鳥駅で発売していただいています。

こうした体験を通して、生徒たちが地域に愛着を持つとともに、地元の交通インフラ事業等にも関心を持ってくれることを望んでいます。卒業後、地域の活性化に役立つ人材に育ってくれば、まちにとっても大きな財産になるのではないのでしょうか。地域創生のため、自分たちには何ができるのか、これから一緒に考えていきたいと思います。



飛鳥駅前